

シュレナ

— ヒロイズムの終焉 —

小林 卓

1 政治ゲーム

パルティアの国王オロドは、最大の敵ローマ人を敗ってローマの脅威を減じ、かつ、隣国アルメニアを属国として、一見すると最大の軍事的・政治的成功をおさめたかに見える。望外な結末に喜びながらも、明敏なオロドは自身の体制の不安定要因を見逃さない。それは、ローマ軍を破った将軍シュレナの声望と実力の高まりが、王政に不安を与え脅威にすら成ってることである。シュレナは、すでにオロド王を支える政治的重臣であった。なぜなら、王位を離れ不遇をかこっていたオロドを支援して王位に就かせたのはシュレナだったからである。

『シュレナー人がわしを異境の地から呼び戻してくれた。彼一人が、盗まれたもの、王笏を取り返してくれた。』

Suréna de l'exil lui seul m'a rappelé;

Il m'a rendu lui seul ce qu'on m'avait volé,

Mon sceptre;

711-713

そして、いまローマ軍という最大の脅威を破った事によって、シュレナは有力な家臣というより、王が脅威すら覚えるような政治的存在となった。外敵の排除という課題を達成したあとに、内なる強力な臣下をどのように処遇すべきかという課題が現われたのである。王は部下シヤスに打ち明ける。

『報い様のないほど仕えられるのも、恩義が重なれば、うっとうしいものよ。』

『忠義なるものは快からず、有用なるものは窮屈』

『彼の名声と富において、富は重石であり名声はうるさい』

un service au-dessus de toute récompense

A force d'obliger tient presque lieu d'offense: 705-706

Le plus zélé déplait, le plus utile gêne, 709

Et dans tout ce qu'il a de nom et de fortune,

Sa fortune me pèse, et son nom m'importune. 721-722

シュレナの脅威が現実のものであるか、あるいは、根拠のあるものであるかと言うことは問われずに、王の不安な心理によって増幅され、悪夢のように王のオブセッションとなる。

『王位を分けようか、もし王位の大黒柱に甘んじなかったら、すべて彼のものとなる。わしが王位を嘆き悲しんでも、彼は城壁を撃ち破ってくるだろう。たとえ神々に祈って

も、彼は戦いに勝利するだろう。それを思えば、震え、赤くなり、腹が立つ。そして、いつの日か、彼が実力で取り立てに来るのではないかと心配してる。』

Lui partager mon trône? Il serait tout à lui,
S'il n'avait mieux aimé n'en être que l'appui.
Quand j'en pleurais la perte, il forçait des murailles,
Quand j'invoquais mes dieux, il gagnait des batailles.
J'en frémis, j'en rougis, je m'en indigne, et crains
Qu'il n'ose quelque jour s'en payer par ses mains; 715-720

シュレナが自らの武力と声望を頼りに、自らに取って変わろうとするのではないとまで王は、おびえる。こうした例は、実はオロドが弱い王であることを示しているのだが、シュレナの処遇問題が、王権にとって最大の政治的懸案となったのである。

もっとも、国王も手を拱いてこうした事態を招いたのではない。アルメニアのアルタバズ王の征服には、オロド自らが向かい、ローマ軍にはシュレナを当たらせたのは、アルメニアの攻略は比較的簡単であるが、ローマ軍は名だたる難敵である。シュレナでも苦境に立たされるであろう。その時、アルメニアを攻めたオロドが援軍としてやって来てシュレナに合流し、ローマ軍を破れば、勝利の栄誉は、シュレナではなく王自身のものとなると読んだからである。ところが、王の読みは外れて、シュレナはすばやくも堂々の勝利をおさめ、その名はアジアとヨーロッパに轟き、王を凌いだという訳である⁽¹⁾。

こうした国王の陥った難儀に対して、シヤスは策を提言する。

『政治の英知は、二つの方途を教えてください。シュレナがどのような勲功を挙げたにせよ、何を期待しているにせよ、彼を滅ぼすか、それとも婿となさるかです』

『彼を滅ぼすか、あるいは、御前の安全を確保なさるかいずれかでなければなりません。中間はないのです』

La saine politique a deux extrêmes.
Quoi qu'ait fait Surena, quoi qu'il en faille attendre,
Ou faites-le périr, ou faites-en un gendre. 728-730
Il faut, il faut le perdre, ou vous en assurer:
Il n'est point de milieu. 736-737

このドライで、論理的、明快な提言の中にシュレナ問題の政治的解決は尽きている。敢えて整理すれば、王政に取って最善の策は、シュレナを王政と言う体制の内に取り込むことによって、シュレナを安全無害化し、王政の強い味方として利用することである。それが出来ないならば、シュレナを殺すことによって危険分子を除去すること、この二つの選択肢があるということである。オロドは、最善な選択、シュレナを婿にとることによって切り抜けようとした。政治的、道徳的見地からもまことに当然な決断であった。だが、オロドの目論見はまたも外れ、シュレナの暗殺という次善

の方策を取ることを余儀なくされたのである。

本劇の時は、二組の婚姻が挙行されようとする前日におかれている。二組の婚姻とは、オロド王の王子パコリュスとアルメニア国の王女ユリディアスの結婚、これはパルティアとアルメニアが結んだ和睦（実質的にはアルメニアの属国化）の徴であり、そして、オロド王の王女マンガヌとシュレナの結婚である。二組の婚姻の行なわれる日は、オロドがこれまで追求してきた政策の総決算、政治的勝利が打ち立てられる日なのである。戦争の勝利と外交の勝利、および内政においてはシュレナの体制化によって、磐石の王政が確立される晴の日であった。

この決められていた結婚がならなかった経緯が、本劇の実質となっており、そこには様々な人間的な、感情的な、また政治的な葛藤が展開されて面白いが、紙数の都合でデテールを追うのは省略する。簡単に言えば、それぞれの結婚に対するシュレナの拒絶、ユリディアスの忌避に出会ったことがオロド王の目論見が失敗した理由である。オロド王は純粋な政治の人間であり、彼自身が結婚の当事者でもないのに、このようなケースによくみられがちな感情的なトラブルで足を掬われた訳ではない。そもそも、結婚とはオロドにとって政治そのものであり感情問題ではない。

『我々が結婚せねばならないのは、王子をたくさん儲けて、王笏の支柱、国々の守りとするためよ。我らの力はそこにある。復讐がかなわぬのでは、謀反を勇気づけるのみ。そして、我らの縁組においては、国家の利害が、美貌に目を塞ぎ、愛に心を閉ざすのだ。我らを動かすのはただ政略のみ。それが第一。愛情が混じることもあろう。あれば喝采し、なければ諦める。』

Il nous faut un hymen, pour nous donner des princes
Qui soient l'appui du sceptre et l'espoir des provinces:
C'est là qu'est notre force; et dans nos grands destins,
Le manque de vengeurs enhardit les mutins.
Du reste en ces grands nœuds l'Etat qui s'intéresse
Ferme l'œil aux attraits et l'âme à la tendresse:
La seule politique est ce qui nous émeut;
On la suit, et l'amour s'y mêle comme il peut:
S'il vient, on l'applaudit; s'il manque, on s'en console.

1029-1037

オロドが追求するのは、王政の安定と確立に他ならないのであるから、それに直接関係しないものについてはいくらかでも妥協することが出来た。例えば、王はシュレナを介してユリディアスがパコリュスとの結婚を望んではいないことを知ると、王子とユリディアスの結婚を破棄してもよいとほめかしたりする。また、シュレナの頑固な抵抗に出会って、ついには王女マンガヌとシュレナとの結婚にさえこだわらないという態度にでる。彼が望み決めた結婚の組合せさえ取り下げてよいと言う王の態度からは、オロドがどれほどの妥協と譲歩を見せたかがえよう。

オロドが、シュレナに求めた最後の和解策とは、誰かと結婚すること、誰でもよいが王にとって脅威にならない相手を選ぶこと、この二点であった。このことは、シュレナに行動の自由を渡さないということを意味する。シュレナが自由な存在であること、どの様な行動に走るか分からないと言うことが、王にとって最も不安な憂慮すべき事であった。従って、オロドはシュレナという脅威をなくすためにミニマムな条件まで降りた訳である。政治的柔軟性と言うより、オロドの王としての弱さが露呈したと言うべきであろう。これさえ拒否されて、オロドは万策尽きたのであった。

『ふさわしい連合を選ぶがよい、どの様な点に関しても、わしが羨むことのないような連合いを』

Choisissez un parti qui soit digne de vous,

Et qui surtout n'ait rien à me rendre jaloux: 947-948

ここで、当時ホットな政治的トピックであった問題、マキャベリズム⁽²⁾に、もとよりここではコルネイユ劇に限定してであるが触れておきたい。コルネイユ劇においては、相対立する二つの政治的イデオロギーが出現する。一つは王権神授説を基礎とする正統王政のイデオロギーであり、当時の公認のイデオロギーであるとともに作者コルネイユ自身が信奉する政治的信条でもあった。一般的に言えば、それはもう一つのコルネイユ劇の思想的バックボーンであるヒロイズムの政治的基盤であり、正統王政イデオロギーとヒロイズムの幸運な連携こそコルネイユの理想であった。他方が、マキャベリズムである。それは反正統王政派、即ち、僭首、墮落した王、篡奪者などの血統によらずに実力で権力を手にいれたり、不当に権力を行使する全てのものの奉ずるイデオロギーであり、反ヒロイズムであり、不道德、腐敗、墮落の政治として貶められている。正統王政対マキャベリズムの角逐は、『ポンペ』以来コルネイユ劇の頻出の政治的主題となったが、本劇でも、オロドの政治的手法はマキャベリズムという観点から見られ批評されており、オロドは僭首でも篡奪者でもないのであるから、墮落した王、王としての責務を果たせない政治的・精神的にも弱い王として糾弾され、彼の政治は腐敗した王政の見本とみられているのである。

ところで、こうしたコルネイユ的、あるいは17世紀的偏見から離れて、今日でさえ持っているマキャベリズムという蔑称が含意する様々な意味を払い落として、より客観的にみれば、マキャベリズムは伝統的な政治思想が纏っていた道徳や神学を離れて、政治というゲームに対して沈着冷静に合理的に対処し分析しようとする新しい態度の誕生と評価出来るし、事実、それは近代政治学の先駆でもあったのである。オロド王の方策をマキャベリスティックと形容することに反対はしないが、そこに道徳的裁断を強く含ませるべきではないだろう。オロド王に過失があったすれば、シュレナに対して必要以上の不安を抱き、王として自らを貶めるほどの譲歩をした、弱さにあったと言うべきであり、彼の行為は道徳的過失と言うより政治的失策である。

オロド王の行為がマキャベリズムという非難を受けるのは、(今日のコルネイユの評家達さえからも)、シュレナを暗殺した事である。しかし、道徳的な判断を停止して、オロド王の政治的企図を辿って行けば、シュレナの暗殺は必然的な帰結であった。他の解決策はことごとく捨てられ、

つぶされ、放棄されたのである。オロド側の事情は触れたので、今度はシュレナの立場から見てみよう。すると、彼の輝かしい軍事的成功の裏に、悲しむべき政治的無知、無能が潜んでいる事が明白となる。シュレナは宮廷社会に生きて、かつ將軍という地位にある以上政治的人間であるはずだが、実際は全くの非政治的人間として振舞った。まず、彼は自分自身の存在が、オロド王に脅威を与えていること、政治的不安定をもたらしていることを十分に認識していない。確かに、そうなのは彼の意図したところではないし、彼の責任でもないが、余りもの現状認識の甘さである。また、王が事態の打開のために出した様々な提案に対しても拒否を繰り返すのみで、有効な代案を出すことはない。自分とマンガヌとの結婚に代わって、パコリュスとシュレナの妹パルミスとの結婚を提案するが、これが王を満足させなかったのは言うまでもない。シュレナ自身の処遇については何も触れられていないからである。

シュレナとすれば、愛するユリディスとの結婚が実現できれば最上であるのだが、その実現性がないことは彼とて知らないわけではない。そこで、少なくともシュレナは、自身については誰とも結婚しないことによってユリディスとの愛の証としようとしたのである。そのため、王女マンガヌとの結婚を拒否し、さらに誰とも結婚しないことによって独身を確保しようとしたのである。シュレナが確保しようとした独身とは、実態はユリディス一人への忠誠という拘束を意味していた。だが、政治的には、シュレナがいつ王権を転覆するかも知れない自由を手放さなかったことを意味するものであった。こうして、王とシュレナの利害は相容れないものとなり、真っ向から対立するのだが、ここに政治的解決の道が全くなかったとはいいい切れまい。少なくとも、オロドは解決への道を探りなすべき譲歩も繰り出したのに比して、シュレナはオロド王が抱えた政治的課題について明察を欠くとともに、その解決に非協力であった。このような、シュレナがみせた政治的秩序の建設、政治的統合への無関心、非協力は、政治的人間たるオロドの理解を越えたであろうし、実際シュレナの身分や地位を考慮すると不可解な奇妙な態度である。彼が王の最終提案を拒んだときに、来るべきものは暗殺であることは誰の目にも明かであった。ユリディスや妹のパルミスが、警告を与え逃亡を勧めたにも関わらず、シュレナは何の手だてを打つことなく死を甘受した。逃亡することもなく、反逆することもなく、いっぺんの抗議の声すらあげず、あたかも、自らの生死にさえ関心を失ったかのようにである。このようなシュレナの非政治的振舞い、あるいは政治的無関心の由来するところはなんであろうか。政治へのまったき絶望であらうか。確かにそれらしい言葉を、彼は死の直前に口にする。彼は、暗殺を目前にして政治への一般的な告発を披歴している。

『自然の情に反して、国王の半分は肉親殺しから生まれているときに、支配権のために兄弟の血で手を汚し、息子は、父の死を今かと待っている』

Quand malgré la nature, en dépit de ses lois,
Le parricide a fait la moitié de nos rois,
Qu'un frère pour régner se baigne au sang d'un frère,
Qu'un fils impatient prévient la mort d'un père? 1639-1642

死の直前の絶望的状况で発せられた言葉であるだけ割り引いて受け取らねばならず、このような口実が、シュレナの非政治的な自らの責務を放棄した振舞いを正当化できるとも思えない。政治という汚れに身を沈めたくないならば、何故彼はオロド王を助け、王位につかせたのかと言う疑問が浮かぶ。オロドを復位させることによって、王政の再建を計ったためだろうか。とすれば、オロド王の政治的企図についての非協力ぶりは納得しがたい。シュレナには、根本的な政治的動機というものが欠けているし、彼の政治的行動には一貫性がない。行動において一貫性の無さは致命的である。この点を見れば、シュレナは非政治的と言うより政治的無能と評されるべきである。シュレナの政治的抹殺は、ほとんど運命的と言えるほどに彼の行動からしても不可避であったのだ。

王と英雄の関係もコルネイユ劇中重要な主題をなし、関係の裏表が考察されているが、一般的に言えば両者は相携えて、英雄は王に力を貸し貢献し、王は英雄に庇護と恩恵を与えるものであった。しかし、こうした蜜月関係は遠くなり後期の作品では稀になる。ことに、本劇においては、英雄が存分に力を発揮して並外れた武勲を上げて、それが王権の強化や国家の創建に結実せず、逆に王の英雄への不信という形でネガティブにかえって来るのである。英雄の功績を正しく王政が受け入れないと言う意味で、本劇に王政の退廃を読み込むことは正しい⁽³⁾。オロド王の王政に、根本的な脆弱という墮落がみられることは前述した通りである。

王政的秩序の退廃、喪失の渦中、報われぬことなく悲運の運命に倒れた英雄はいくらもいる。セルトリウスをその代表にあげよう。同じく王政的秩序の喪失中、艱難辛苦のあげく最後に報酬を得た英雄もいる。『ロドギュンヌ』のアンチオキユスはその例であろう。成功した、失敗したは別にして、セルトリウスにはローマの再建という大いなる抱負があり、アンチオキユスには王位の継承、そして正統な王による王政の復権という望みがあった。つまりは、政治的な動機とビジョンがあった。だが、シュレナにはそのようなものはない。彼はオロドをもり立て王位に戻し、ローマの侵略に対抗して国難を救った。だが、何のためにと問われても答えようがないのである。彼の英雄的な功績も偉大も、単なる戦士の武勲に過ぎず、何の政治的な統合、価値に結びつく事なく空しく浪費されたのみである。

シュレナはたまたま墮落し腐敗した王政に直面すると言う不運を背負ったのだと言えるかも知れない。オロドが然るべき王であったならば、シュレナの英雄的行為は意味を与えられ、然るべき政治的機能を果たしたであろう。しかし、シュレナの英雄としての純度はそれほど高いものであろうか。彼がオロドと政治的に連合してこれまでやってきたにも関わらず、最後の詰めで離れたのはなぜか。オロド王の王政が血にまみれた惨劇でしかないことを明かし、そうした政治世界からの離脱を望むかのような口吻を漏らす、それは、シュレナの経歴を見たとき弱々しい抗弁でしかない。本当の理由は、彼がユリディスとの間に育んだ愛にあった。成就することのない愛に身を任せ、それを断念する真の勇気を持たなかったことが、シュレナを政治的アパシーに追い込み、英雄としての高みから失墜させたのである。

本劇においては、かつてのようにはや英雄の武勲が理想的王政の援護を受けて華麗に華さく

状況ではなくなってしまう。理想的王の登場は期待されるべくなく、もっと現実的ないわばマキャベリスティックな王権に相對しなければならぬのである。より一層リアリスティックになった、厳しい政治ゲームの中で英雄はその企図を実現しなければならず、挫折に終わるとしても無理のないことであった。問題は、シュレナが現状の打開について何の役割をも果たそうとせずに、全くの政治的無能と無知の限りを尽くし、オロド王の政治的課題を解決するための助力も共同も出来ず、果ては、自らの暗殺を無抵抗に甘受することになった点である。このような政治世界からの離脱の底には、シュレナの内面における英雄としての失墜が潜んでいたのである。以上からみられるように、シュレナをオロド王のマキャベリスムの犠牲者と捉えるのは単純化した見方である。シュレナの暗殺は、政治的算術からすれば当然な帰結、論理的結果である。その責任は、オロドとシュレナの双方にあったと言うべきである。一方的にオロドの道徳的資質に関わるものではない。

道徳的・神学的な仮面がはがされたマキャベリスティックな政治世界は、当然なことに合理的で戦略的なゲームと化していく。シュレナに根本的な政治的動機が欠けていると言ったが、それはオロド王とて同然である。もはや王は、神の地上における代理人ではなく、神が預けた高貴な使命を帯びていない。王権の保持と拡大という得点を目指しながら、政治というゲームに興じるプレイヤーに過ぎないのである。こうした観点に立つ限り、オロドはかなり見事に老練にプレイを演じたが、華々しい勝利は獲られなかった。シュレナの抹殺は、王にとっても痛手であったからである。シュレナは、オロドがもくろんだゲームを受け入れず、プレイを拒否した。シュレナは、政治ゲームにおいてオロド王の敵手として登場したのではなく、そもそもゲームに参加しなかったのである。もし言えるならば、政治というゲームそのものから降りていたのである。従って、きわめて政治的人間であったオロドが読みをはずしたのは、シュレナが非政治的人間として振舞い、彼と同等の政治的次元に立たなかった故であった。

2 人間的絆としての愛

シュレナがオロド王の娘マンガヌとの結婚を拒否したのは、表面的理由⁽⁴⁾はさておき、根本的にはユリディスとの愛のためだと言える。もし、シュレナとユリディスの愛がなかったならば、シュレナがオロドの要請を拒否することはなかっただろう。前述したように、シュレナの暗殺は政治力学の過酷な論理による帰結ではあるが、こうした政治的結末に至った理由をシュレナの内面に求めれば、ユリディスとの愛にあったのである。ところで、この愛とはどのようなものであったか。

この愛もこれまでのコルネイユ劇に見られた愛と違って独自の面を持っていた。感覚の衝撃という官能の中に誕生し、常にエロチスムの香りを漂わせたコルネイユ的愛⁽⁵⁾と違って、大変禁欲的であるとともに、寡黙な秘めた愛であった。ユリディスの美貌、美貌が約束する享楽という肉感的

な事柄を語るのは、パコリユスがユリディスにする愛の口舌においてでありシュレナの言葉には見られず、パコリユスとパルミスが饒舌な出来合いのギャラントリーに終始するのは対照的に、シュレナとユリディスには、そうしたものはいっさいみられない。二人の愛は、実現性の全くない禁断の愛であるのみならず、王子パコリユスの婚約者となってしまったユリディスと愛を育むことは政治的重罪にも相当するから、二人の愛は社会に向かって徹底的に隠匿せねばならなかった。そのような社会的な事情を斟酌しても、二人の愛は初めから隠れ、人目を忍ぶ。

『彼は私の心をかち取ったのです。私の目は彼に魅了されてしまい、隠された心の内を不意に彼の目に顕したのです。言葉にならないもの言いによって、彼に隠そうと努めていたことがあらわになったのです。そして、彼の恋心を私に示した同じ視線が、私の視線から私の心の奥の秘密を盗んだのです。』

Il l'obtint, et mes yeux, que charma sa présence,
Soudain avec les siens en firent confidence.
Ces muets truchements surent lui révéler
Ce que je me forçais à lui dissimuler,
Et les mêmes regards qui m'expliquaient sa flâme
S'instruisaient dans les miens du secret de mon ame. 49-54

ユリディスは確かにシュレナに向かってマンガヌとの結婚を禁じたが、他の女との結婚まで禁じたのではない。ユリディス自身がシュレナに結婚を勧めている。

『後生のために、あなた様は子孫を残さねばなりません。あの名高き死者たちは、殿が今その身代りとなっておいでですが、一門の内に生き返って来なければなりません。私はその血筋を絶やそうとは思いません。もしそうした願いをほんの僅かでも漏らすようなことがあれば、大逆罪を犯したとみます。』

A la postérité vous devez des neveux;
Et ces illustres morts dont vous tenez la place
Ont assez mérité de revivre en leur race:
Je ne veux pas l'éteindre, et tiendrais à forfait
Qu'il m'en fît échappé le plus léger souhait. 296-300

ユリディスの結婚の勧めには、子孫を残すためという社会的な理由がつかののだが、血統こそ当時の公認のイデオロギーの支えであり、結婚という制度の支柱であった。ユリディスの言葉を信じるならば、シュレナはマンガヌ以外の女性、オロド王が少しも脅威を覚えない相手と結婚することはできた訳である。つまり、オロドとの政治的妥協の余地はあったのである。しかし、シュレナはユリディスの勧めを受け入れなかった。それは、シュレナの自発性というよりユリディスの真意を推し量ったからであろう。先ほどの言葉は、いわば社会的体裁を被った言であって、ユリディスがシュレナを誰にも渡そうとしたくないことは、彼女の態度から明白であった。ユリディスの非妥協的な

態度からは、シュレナが他の女のものになるよりシュレナが死んだ方がましだという結論が論理的に出て来るはずだが、もとよりそのようなことをユリディスが明言できるはずがない。むしろ、先ほどのような逆の言葉が出て来る。シュレナは、暗黙のうちにユリディスの心を受け取り、自ら死に赴いたのである。この点、ユリディスの愛は、エゴイスティックなものを含んでいた。事実、シュレナの妹のパルミスは、この点を追求して、最後には、ユリディスから愛を断念するという言葉を引き出したほどである⁽⁶⁾。しかし、暗黙の内の死の了解には、生死を越えた何かを二人の絆に見いだした為と解釈する方が、二人のためには親切であろう。

シュレナとユリディスが結婚という形で結ばれる可能性は、政治的状况から全くなかった。二人がそれぞれ自由の身でいて、心情において結ぶ可能性はどうかと言えばやはりなかった。ユリディスはアルメニアの王女と言う身分に束縛されて自身の自由を持っていなかったし、シュレナは先にみた通り政治的力学から解放され得なかったのである。それ故に、二人の愛は潜伏し、内向し、二人だけが内密に結んだつながりと言うべき性質のものとなった。パコリュスの執拗な詮索をかわすためにもそうなる必要があった。こうして、二人の愛は結婚へと通ずる表街道を行けず、と言って私的な感情として育むこともならず、内に潜り隠れた場所で秘かに保持するものとなったのである。禁欲的で内閉的な愛となった二人の愛は、二人を結ぶ連帯、あるいは絆のシンボルと言うべきものであった。実現不可能な絶望的な愛と言っても、それ故に内圧が高まり果ては情念の奔流となって愛する者を打ちのめすと言うラシーヌ的世界が現われるのではない。情念は濾過され、静かな浄化された感情となって、現実の苦難にぶち当たった二人の人間を結ぶ絆となったのである。この絆の保持に、シュレナは彼の存在を賭けた。政治世界における王との闘争に敗退した根本的理由はここにあった。

彼等の愛の独自の性格を評価するに際して、伝統的なロマンチック・ラブと混同する誤解は、避けるべきであろう。愛という人間的な感情や価値を無視、あるいは軽視するオロドに代表される政治的人間の価値観への異議申し立てとして、二人の愛を捉えようとする解釈がある。それによれば、政治と愛という二つの価値が対立し、優劣を争うものと言うことになる。シュレナが王子パコリュスにした感動的な科白などそうした見方を支持するように見える。

『心情の世界は、政治の支配するところではございませんし、愛は自らを貴び、国王や至上の権力を認めないのです』

Que l'empire des cœurs n'est pas de votre empire,

Et que l'amour, jaloux de son autorité,

Ne reconnaît ni roi ni souveraineté? 1310-1312

愛はそれ自体至上の価値を持っており、政治的権力の支配できないものであると言う主張は、遠く『オラース』におけるカミーユの態度を思わせる。もっとも、カミーユのように激越な主張ではなく、シュレナでは控えめな抗議という体裁を取っている。シュレナとユリディスの愛に、愛の絶対価値化にまで至る情念の高まりを認めることはとうてい出来ないのである。この世の一切を放

棄した人間同士の、相互認識・連帯の徴と言うべきものであって、価値として立てる積極的な自己主張を持たないからである。あるいは愛を政治的価値よりも優位とする考えを二人に帰すことも当を得ない。愛という個人的・私的な感情を政治的価値よりも優先させるには、二人は余りにも身分が高すぎ、宮廷という政治的世界に浸かっていたからである。彼らの愛は、二人だけの人間的な結びつきにとどまり、その向こうにはいかなる神話的な眩暈もない。例えば、この世ではありえなかった愛の成就をあの人に期すと言う主題は影もなく、二人の愛を伝説化しようとするいかなる試みも見られない。

コルネイユ劇において、愛は通常幸福のシンボルであり、多くの場合政治的責任のために、愛という幸福を放棄することになるのだが、シュレナとユリディスの愛は、決して幸福を意味していないのである。愛とは、この世の確かな最後の幸福を探し求むべき隠れ家ではもはやなくなったのだ。シュレナが用いる幸福 *bonheur, heureux* という語の皮肉な用法をみられたい。

『何という幸せ！ 敢えて言いますならば、わが恋が願う取るに足りない幸福です』

『幸福な生活に思いをお向けください。そして、私に死なせてください』

Que je serais heureux! Mais qu'osé-je vous dire

L'indigne et vain bonheur où mon amour aspire! 1561-1562

Songez à vivre heureuse, et me laissez mourir. 1564

こうして、愛の自然の起源であるエロスから遠く離れ、様々な精神的・人間的価値付けも持たず、独自の相貌を帯びた二人の結合は、苦痛や死と等価におかれたのである。ユリディスがシュレナに漏らす言葉には、*souffrir, souffrance(244) languir, langueur(261-262) noir chagrin(265) amertume(266) douloureuse et fatale tendresse(270)*と言った言葉が頻出する。そして、二人の愛のみならず生を要約する科白が、ユリディスとシュレナの双方によって唱和される。

『いつも愛し、いつも苦しみ、いつも死ぬ』

(je veux) Toujours aimer, toujours souffrir, toujours mourir. 268

O Ciel, s'il faut toujours aimer, souffrir, mourir! 368

愛と苦と死が何の矛盾もなく結びつき、ここでは愛がある価値の実現という積極的な意味合いを失ってしまい、いわば一切の放棄、政治的世界における役割と責任の分担のみならず、愛における自己実現をも放棄する事を意味したのである。二人の愛とは、すべてを擲ったものが、唯一この世に確保しようとした刻印とも言うべきものである。

3 ヒロイズムの終焉

ところで、もう少しシュレナの内面に目を注げば、彼の内面の独自の有様から彼の行動を理解

する鍵を見つけることが出来よう。

『私とともに全てが滅びるがよい、宮、私の死後、この地上を誰が生きようとどうでもよい。かの誉れ高い先祖といっても、暗黒の墓場に光が射すとも言うのだろうか。』

『我々を照らす陽の光が消えてしまえば、死後の生など絵空事に過ぎない。
冷たく、空しい永遠よりも、望んだ幸福を一瞬にせよ手にする方が勝る。』

Que tout meure avec moi, Madame: que m'importe
Qui foule après ma mort la terre qui me porte?
Sentiront-ils percer par un éclat nouveau,
Ces illustres aïeux, la nuit de leur tombeau? 301-304
Quand nous avons perdu le jour qui nous éclaire,
Cette sorte de vie est bien imaginaire,
Et le moindre moment d'un bonheur souhaite
Vaut mieux qu'une si froide et vaine éternité. 309-312

このような言葉が、コルネイユの英雄の口から聞かれるとは、初めてであり全く思いもかけないことであった。コルネイユの英雄達が待望した不滅の栄光、不滅の名声は輝きを失い空しい永遠に変じ、この世におけるいっぺんの幸福に劣るものとなってしまったのである。シュレナの言葉は、コルネイユ劇の思想的バックボーンであったヒロイズムを無惨にも否定したものである。こうした変化は、ヒロイズムが何の実を結ぶこともできないほど政治的状況が悪化したためであるとし、コルネイユは、最後の作品でヒロイズムについてきわめて現実的な醒めた態度を取ったのだとする考えもある。しかし、政治的に悪い状況、あるいは絶望的な状況はこれまで幾度もコルネイユ劇が扱ってきたところである。『ロドギュンヌ』『エラクリウス』『セルトリウス』『アッチラ』といくらでも挙げられる。また、そうした作品において、英雄たちが必ずしも最終的な成功を収めた訳ではない。敗北を喫した例もあるのである。問題は、英雄たちの成功・失敗ではない。シュレナの科白と態度・行動を見て印象づけられるのは、政治的状況の悪化よりももっと根底的な部分、精神とモラルにおける質的变化であり、これまでの英雄たちの示した態度との断層である。かつての英雄達が身に挺した確信と高揚の時は、遠く過ぎ去りもはや戻って来ない。かつて多くの英雄達が信じた諸々の政治的価値、政治的統合の実現、正統王政的秩序の再建や維持、マキャベリスムの打倒、あるいはそうした事業にともなう諸々の精神的倫理的価値、武勇、高邁、友情、栄光と名声、と言った偶像、そのために生命や幸福を犠牲にしてもよいと信じた「永遠」は、シュレナにおいて死に絶えたのである。シュレナに数々の英雄的形姿をみとめることができるにせよ、彼の内でヒロイズムは死に、コルネイユの最後の作品に登場する英雄が自らヒロイズムの終焉を宣告したのである。シュレナが保持したものは、ただ一つユリディスとシュレナが過酷な政治ゲームの渦中において寄り通した人間的絆のシンボルとしての愛のみであった。

このことをどう評価するか。ことは簡単ではないが、私なりに整理すれば、シュレナの英雄的

純度は明らかに下がっており、ヒロイズムという見地からみる限りシュレナは失墜した。とは言え、シュレナの敗北がヒロイズムの敗北をただちに意味するのではない。先に引用したシュレナのニヒリスティックな発言も、割り引いて受け取る必要がある。オラースやオギュストと言った英雄的高みに昇り得なかった非英雄の発言だからである。もっとも、失墜した英雄に、ある人間性を認めることはできないことではない。ヒロイックな価値と行為を否認したにせよ、ユリディスとの愛という人間的価値の保持に賭した行為に、かえって内面化・精神化したヒロイズムを認めたいとする人もいるのである。しかし、ヒロイズムとは本来人間性の純化と高揚を含むのであって、ヒロイズムと人間性は分裂したり、対立するものではないのである。言うなれば、シュレナのヒロイズムが墮落したのと同じくらい、シュレナとユリディスの愛も袋小路に入った行き場のない「失墜」を見せたものである。彼らの愛は、決して純度の高いヒロイックな愛ではない。

ステグマン⁽⁷⁾は、シュレナとユリディスが保持した愛に注目し、この愛の精神的価値を評して人間的自由の最後の隠れ家と言っている。ドルト⁽⁸⁾、ドゥブロフスキー⁽⁹⁾の両者は、この作品をヒロイズムの敗北を検証したものととらえ、次なる歴史的ステップへの弁証法的契機としている。ともに、ヒロイズムの終焉を、ヒロイズムの敗北、ないし否定と理解し、その意味合いを精神的・倫理的、あるいはイデオロギー的に位置づけている。ステグマンは、シュレナの非政治性、非英雄性を過小評価し、相変わらずロマンティック・ラブと言う愛の絶対価値づけの伝統に身をおいて、愛の過大評価にとどまっている。ドルト、ドゥブロフスキーは、コルネイユ劇には非関与的な歴史的弁証法や主人と奴隷のヘーゲル的弁証法という問題を、コルネイユ劇にずらして読み込んだものであり、彼らに取ってはヒロイズムは敗北すべき必然を本質的に有しているのである。だからといって、コルネイユのヒロイズムが敗北を含意していると即断することはできないだろう。

長い劇作の年月において、コルネイユはいつもヒロイズムのスポークスマンであったし、今日でも一般的にはそのように理解されている。彼の内に、ヒロイズムの否定、無効と言った思想を認めることは妥当ではない。ただ最後の作品において、明確にヒロイズムの終焉を描いたことは、それ自体意義深い変化であるとともにヒロイズムを中心の価値として展開してきたコルネイユの劇世界に深い陰影をもたらすことになった。このことは、とかくヒロイズムという光輝の影に押しやられがちであった諸人物、『オラース』におけるカミーユ、『ロドギンヌ』におけるセルーキウスなどの理解に照明を当てることになろう。コルネイユがこうした非英雄的あるいは反英雄的人物を多かれ少なかれ描いていたことはもっと注目してよいことである。余りにも一面的なヒロイズムの理解は訂正されねばならないのである。

参考文献

- A) Corneille, œuvres complètes édition par A. Stegmann Seuil 引用は、この版による。
- B) Corneille, Suréna général des Partes édition par J. Sanchez Nizet
- C) Dort B, Corneille dramaturge L'Arche
- D) Doubrovsky S, Corneille et la dialectique du héros Gallimard
- E) Nadal O, Le sentiment de l'amour dans l'œuvre de Pierre Corneille Gallimard
- F) Stegmann A, L'héroïsme cornélien Armand Colin
- G) Stegmann A, L'œuvre de Corneille Hachette

註

- (1) こうした政治的、歴史的事情については、コルネイユは史実を正確に追っている。詳細は、B)のサンシェの解説を参照。
- (2) 当時の知的・思想的背景、とりわけマキャベリズムの問題については、F)を参照。
- (3) cf B)p. 86
- (4) シュレナが王にした断わり方は、宮廷人の老練と知恵を示す見本のようなものである。
cf 815-844
- (5) 特に初期の喜劇と前期の悲劇に著しい。 cf E)
- (6) 五幕4場、しかし、時は遅すぎた。
- (7) cf F)tomeII G)p. 108
- (8) cf C)
- (9) cf D)